

機関番号：18001

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19720096

研究課題名（和文）共感覚的比喩の「一方向性仮説」に関する研究

研究課題名（英文）An Examination on “one-directional hypothesis” of a Synesthesia metaphor

研究代表者

武藤 彩加 (MUTO AYAKA)

琉球大学・留学生センター・講師

研究者番号：00412809

研究成果の概要（和文）：本研究は、これまで行ってきた感覚間の意味転用には人間の認識システムがどう関わるかという課題に関わる更なる考察である。

言語普遍性の現象のひとつとされる共感覚的比喩の一方向性仮説について、「各言語の共感覚的比喩体系には、様々な多様性が認められる」という仮説を立てて検証することを目的とした。

・調査1:計 15 言語における視覚および触覚から他の感覚への転用に関する言語調査および分析（被験者数 75 名）。

・調査2:計 3 言語を対象とした触覚、視覚、味覚、嗅覚、聴覚から他の感覚への転用に関する調査および分析（被験者数 180 名）。

・調査3:スウェーデン語における味を表す言葉に関する調査および分析（被験者数 60 名）。

調査1および調査2においても、各言語の共感覚的比喩体系には多様性が認められるという結果を得た。中でも仮説の反例である「嗅覚→味覚」および「聴覚→味覚」表現については、複数の言語において転用の割合が高いという言語事実が明らかになった。以上の結果から、各言語における共感覚的比喩体系は決して一方向ではないものの、言語の違いを超えた普遍的な要素が存在する可能性がある」と結論づけられる。

研究成果の概要（英文）：The “one direction” tendency, in terms of synesthesia metaphors, is the consistent diversion of a word’s basic meaning to emphasize a sensation from another sense category. The “one direction” tendency in synesthesia metaphors is assumed to be a linguistic universal, and is referred to as the “One Direction Hypothesis.”

To address these concerns, this research focused on the following three points

1) First, meaning diversion in 15 languages from "sight" and "touch" to other senses was investigated as a pilot survey. As a result of this investigation, the numbers of examples diverted from “touch” were found to be more than the number of "sight" expressions in all the languages surveyed. However, diversion examples from “sight” were also found in all the languages without exception. Therefore, it can be said that the results of this investigation were as follows. Although the One Direction Hypothesis is not absolute, the tendency of meaning diversion in all 15 languages was found to support this hypothesis.

2) Next, the meaning diversion from "sight" "hearing" "touch" "taste" and "smell" to another senses was investigated among 60 native speakers in English and French. The results of the

previous pilot survey were confirmed by this investigation. Thus, it became clear that the tendency of the direction of the meaning diversion generally supported the "one-way hypothesis" across all sense categories. In addition, the data contained many examples counter to the One Direction Hypothesis. However, among the exceptions found, it is noteworthy that only "smell→taste" counter-examples frequently occur in both English and French.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,400,000	450,000	2,850,000

研究分野：認知言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：共感覚的比喩、一方向性仮説、言語普遍性、生理学的普遍、身体性、生得性、経験的基盤、五感

1. 研究開始当初の背景

これまで、感覚間の意味転用にはどのような動機付けがあるか、そして人間の認識システムがどう関わるかについて考察を続けてきたが、それを更に発展させ、主に次の点について調査及び分析を行うことを希望した。

- ・様々な言語における「共感覚的比喩」を調べ、言語の違いを超えて共通する点（生理学的普遍）と異なる点（文化の違いにより生じる差異）を明らかにしたい。

- ・サピア・ウォーフに代表される「言語相対性仮説」(Sapir-Whorf hypothesis/SWH) と、Berlin & Kay (1969)らの「認知主義的立場」をめぐる諸問題について、各言語の「味を表す表現（形容詞、オノマトペ）」を通して考察し、「基本味覚語」および「発展の順序」の含意的階層関係を明らかにしたい。

2. 研究の目的

この研究は、言語普遍性の現象のひとつと

される「共感覚的比喩」の「一方向性仮説」について、主な言語を対象に調査を行ったものである。なおこれまで英語と日本語以外の言語について十分に調査は行われていない。

本研究では「各言語の共感覚的比喩体系には、様々な多様性が認められる」という仮説を立てて検証した。本研究は人間の生理学的普遍と文化等によって異なる経験的基盤との兼ね合いに関する考察であることから、言葉の意味に関する重要なテーマの一部を担うものである。

3. 研究の方法

調査は大きく分けて3つ行われた。

(1)2007年度～2009年度の3年間で、中国語、英語、タイ語、ドイツ語、タガログ語、韓国語、フランス語、ロシア語、アラビア語、マレー語、スペイン語、ベンガル語、ポルトガル語、スウェーデン語および日本語の計15言語における「視覚→他の感覚」（一方向性

仮説に反する例) および「触覚→他の感覚」(一方方向性仮説に従う例) について調査を行った。

(2) これまでの調査で得たデータを裏付けるため、次に挙げる言語については海外へ赴き、インフォーマントの数を約 60 人に増やし更なる調査を行った。

- ・英語、およびフランス語 (2008 年度)
- ・スウェーデン語 (2009 年度)

なおこれら 3 つの言語については、視覚と触覚からの転用のみならず、他の感覚(味覚、嗅覚、聴覚)からの転用例についても併せて調査した。

(3) 今後の研究の発展に向け、スウェーデン語における「味を表す言葉」の収集についても調査・分析を行い、学会誌の論文にまとめた。

4. 研究成果

調査(1)では、15 の言語における視覚と触覚を表す語についてデータを集め、分析を行った。15 言語全体における触覚表現と視覚表現の割合について、すべての被験者がすべての転用例を「言える」と判断した場合を 100% とすると、触覚表現は 38%、視覚表現は 17% の例が自然であると認められた。このうち、「視覚」表現のなかの「視覚→聴覚」を除く例が一方方向性仮説に反する例であり、平均 11.3% の例が自然であると認定された。この調査結果全体を振り返ると、転用の傾向としては「視覚表現」に比べ「触覚表現」の方が多く存在するといえるが、視覚表現からの転用も各言語に一定数存在することがわかった。また、これら「視覚」表現のうち「視覚→聴覚」を除く一方方向性仮説に反する例に注目すると、例えば「視覚→触覚」表現は英語において多くの反例が存在し(38%)、中国語やアラビア語にも一定数の用例が存在する

(ともに 17%)。また「視覚→味覚」表現はやはり英語が最も多く(33%)、次いで中国語(22%)、日本語、スペイン語、韓国語に一定数の用例が存在する(19-15%)。「視覚→嗅覚」へは最も多く用例が認められ、やはり英語に目立って多く認められたほか(42%)、日本語(24%)、スペイン語(18%)と続き、中国語、アラビア語、ドイツ語はともに 15% という結果を得た。以上、調査 I の結果をまとめると、触覚からの転用表現の平均が 39% であるのに対し、視覚からの転用表現は平均 16% であることから、15 の言語における共感覚的比喩の体系には概ね一方方向的な傾向が認められるという点が明らかになった。

調査(2)では、4 つの言語を対象とし、「五感内すべての転用表現」を取り上げ、分析した。その結果、やはり概ね各言語の五感内の意味の転用は仮説に沿うという結果を得た。但し、仮説に沿わない「嗅覚→味覚」および「聴覚→味覚」表現については、4 言語とも転用の割合が高いという言語事実から、従来の一方方向性仮説の共感覚的比喩体系に対してはこの 2 点について修正を加えるべきであると主張する。

調査(3)では、スウェーデン語の「味を表す言葉」の収集についても調査を行い、データをまとめ発表した。これは本研究の主旨である「人間の生理学的普遍と文化等によって異なる経験的基盤との兼ね合いに関する考察」に直接関わるものであり、本研究が今後も更に広がっていく可能性を示すものである。

今後はさらに「味を表す言葉」に関する調査についても調査を進め、日本語を含めたアジアの言語の結果と、今後予定されているヨーロッパの言語との結果を照らし合わせ、言語普遍性をめぐる考察をいっそう深めたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 武藤彩加、「スウェーデン語における「味を表す表現」の収集と分類」、『日本認知言語学会論文集』第11巻、日本認知言語学会、査読有、近刊、2011.
- ② Ayaka MUTO (2010) An Examination of Synesthesia Metaphor in English and French, *the 2010 Seoul International Conference on Linguistics*, Conference Papers (Refereed by Full Paper), June 2010. 査読有
- ③ 武藤彩加、副島健作、山元淑乃「共感覚的比喩の『視覚』表現—ロシア語とフランス語を中心に」、KLS 30 (Proceedings of Kansai Linguistic Society), 関西言語学会、2010年9月、203-214頁. 査読有
- ④ 武藤彩加「9つの言語における『共感覚的比喩』—「触覚を表す語」と「視覚を表す語」を中心に」、『日本認知言語学会論文集』第9巻、日本認知言語学会、2009年5月、181-190頁. 査読有
- ⑤ 武藤彩加「『共感覚的比喩』の一方向性仮説における反例の検証と課題—7つの言語を対象とした『視覚を表す語』に関する予備調査の結果から」、『留学生教育』第5号、琉球大学留学生センター、2008年3月、1-18頁. 査読有

[学会発表] (計5件)

- ① 武藤彩加、「スウェーデン語における「味を表す表現」の収集と分類」、日本認知言語学会第11回全国大会、(2010年9月12日)、

於立教大学.

- ② Ayaka MUTO, An Examination of Synesthesia Metaphor in English and French, *The 2010 Seoul International Conference on Linguistics (SICOL-2010)*, June 24, 2010, Korea University, Seoul.
- ③ 武藤彩加、副島健作、山元淑乃「共感覚的比喩の『視覚』表現—ロシア語とフランス語を中心に」、関西言語学会第34回大会、(2009年6月6日)、於神戸松蔭女子学院大学.
- ④ 武藤彩加「9つの言語における『共感覚的比喩』—「触覚を表す語」と「視覚を表す語」を中心に」日本認知言語学会 第9回全国大会、(2008年9月14日)、於名古屋大学.
- ⑤ 武藤彩加「『共感覚的比喩』の一方向性仮説」における反例の検証と課題—7つの言語を対象とした「視覚を表す語」に関する予備調査の結果から」、第3回 沖縄県日本語教育研究会 (2007年3月8日)、於琉球大学留学生センター.

[図書] (計1件)

- ① 大橋正房、山本真人、武藤彩加他著 (2010) 『「おいしい」感覚と言葉 食感の世代』、株式会社 B/M/FT 出版部. 総頁数 159 頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

武藤彩加 (MUTO AYAKA)

琉球大学・留学生センター・講師

研究者番号：00412809